落洞１号古墳発掘調査現地説明会

関市協働推進部文化課文化財保護センター
日時：令和３年７月１７日（土） 10 時から 12 時
場所：関市武芸川町小知野

はじめに

関市には約 300 基の古墳がありますが、武芸川地域は関市内でも古墳が多くみられる地域で、約 80 基の古墳が確認されています。関市協働推進部文化課文化財保護センターでは、武芸川地域の古墳時代の様相を明らかにすることを目的に調査を実施しております。今回は落洞１号古墳の規模や形態、残存状況を明らかにするために、調査をおこなっています。

落洞１号古墳について

権現山から広がる山地の山麓、西谷川左岸に位置します。埋葬施設に全長 9.1mの横穴式石室をもつ古墳で、武芸川地域では最大のものです。主体部は盗掘を受けているため、副葬品などは確認されていません。この古墳は今回が初めての調査となります。築造されたのは横穴式石室の石材の大きさや形などから６世紀後半から７世紀前半と考えられます。

また、この古墳から南東に約 50mのところに落洞２号古墳が調査されています（平成 13 年度岐阜県教育委員会調査）。残存状況はよくありませんが、７世紀前半頃の横穴式石室をもつ古墳（滅失）であったことがわかっています。

調査の成果

落洞１号古墳は直径約 14m（古墳周囲が約 47m）と言われていましたが、今回の調査によって、従来よりも規模の大きい直径約 16m、墳丘の高さが約４mの円墳であることを確認することができました。基壇状の盛土があり、その上に墳丘の盛土をおこなったと考えられます。また、墳丘には葺石（ふきしい）を確認しましたが、全面にあったのではなく、北トレンチから古墳に入口にかけて、西半分にのみ葺石があったと考えられます。また、横穴式石室は墳丘の中心ではなく、東寄りに造られています。

東側の地形をよく見ると山の斜面が直線ではなく、湾曲している部分があり、不自然な地形になっていることがわかります。これは古墳を築造する前に山を削って広い平坦面を確保し、またその土を盛土として使っていたと考えられます。

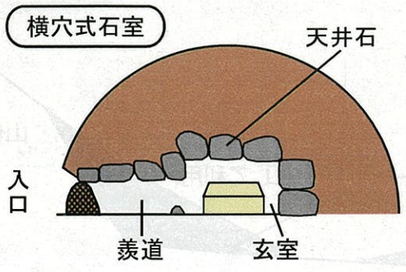
落洞１号古墳は西谷川左岸に位置し、古墳の東側は山の斜面で、西側の方が見通しがよく、遠くからも主に古墳の西側が見えたと考えられます。このため、墳丘の東側に横穴式石室を造ることにより、西側の墳丘を大きく見せることや古墳の西半分のみ葺石をおこなうなど墳丘の西側を見せることを意識して古墳の築造をおこなっていたと考えられます。

落洞１号古墳は今回の調査によって、関市内でも最大級の墳丘規模をもつ後期古墳であることが明らかとなり、古墳を見せるために様々な工夫をしていたことを知ることができました。武芸川地域を治めた豪族のお墓であったと考えられます。

【用語解説】

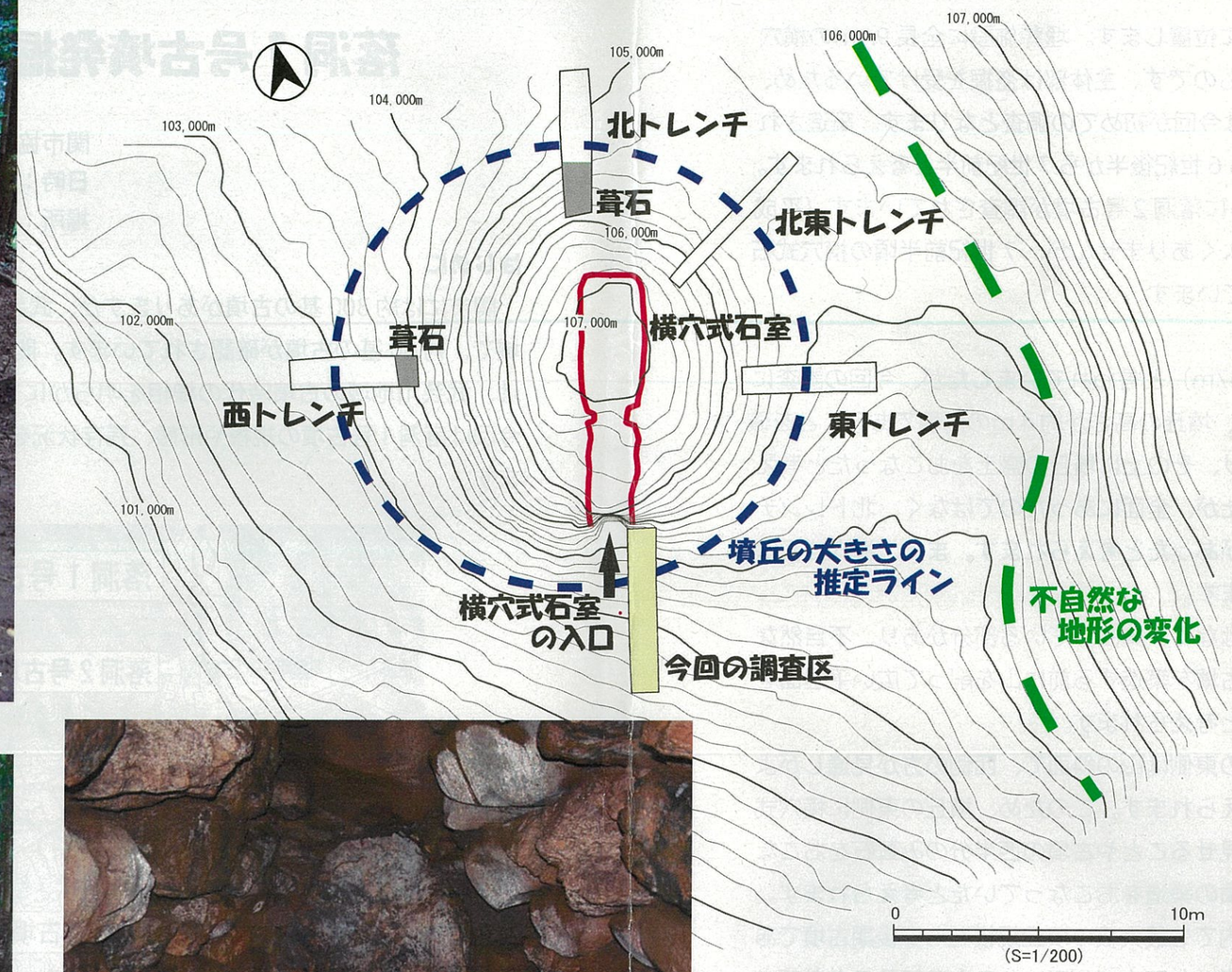
〇葺石：古墳の斜面に葺いた石のこと。古墳の表面を飾り、斜面の土砂流失を防ぐために斜面を覆うようにします。

〇横穴式石室：
石材で棺を納める部屋（玄室）を造り、外部からの通路（羨道）を設けた埋葬施設です。埋葬後、出入口は石や土で塞ぎますが、それを取れば再び入ることができ、追葬（家族など別の人物の埋葬）をおこなうことができました。



発行：関市文化財保護センター
関市武芸川町八幡 1446-1　TEL：0575-45-0500

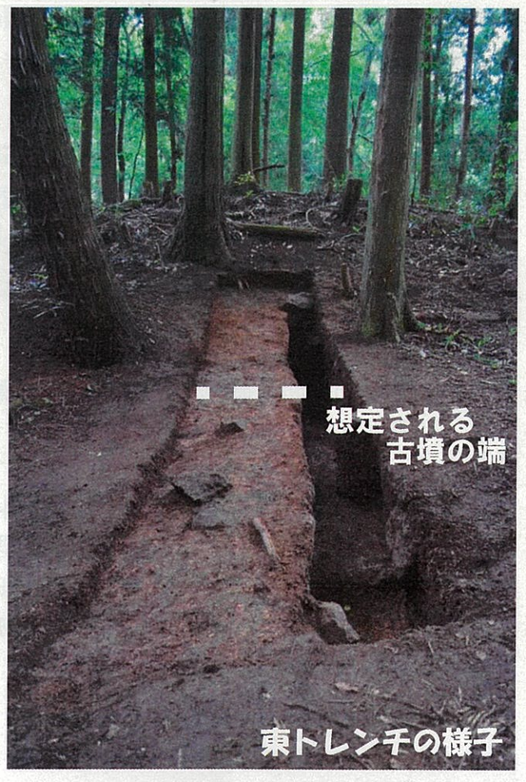
北トレンチの様子

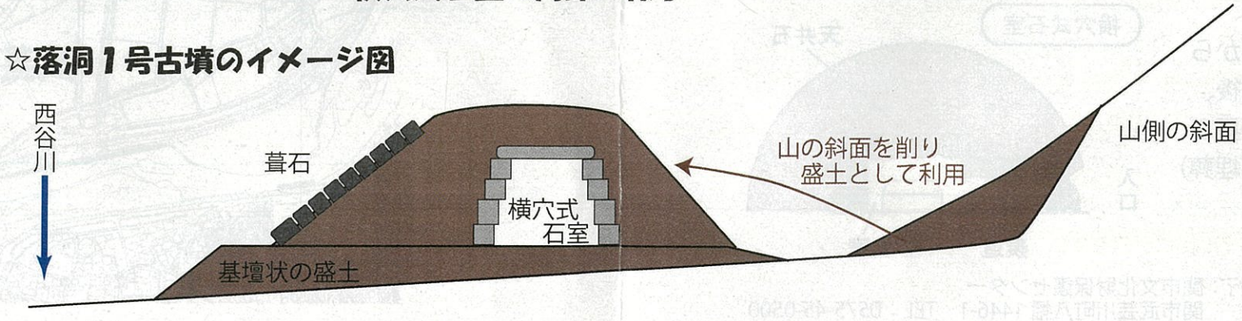


北東トレンチの様子

西トレンチの様子

横穴式石室の内部の様子



東トレンチの様子

☆落洞１号古墳のイメージ図